

ブラジルにおける奄美郷友会の研究

加藤里織

KATO Saori

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 奄美出身者が移住した先での生活を構築するために、同郷の者たちと「郷友会」を組織し、相互扶助を行ってきたことは、よく知られた事実である。

本論はその「郷友会」を、郷里である奄美から最も遠く離れたブラジルにおいて組織された「ブラジル奄美会」を事例に、移住先での奄美郷友会の成立過程と、そこで行われていた文化継承の状況、そして会の終焉について、現地で撮影された写真と記録映像、そして現地での聞き取りを中心に分析を行い、その実態を明らかにすることを目的とする。

「ブラジル奄美会」前組織である「奄美同志会」が組織された時点では、設立の目的に「親睦融和」を掲げている点で、他の奄美郷友会と共通していた。しかし、他の幾つかの点で、多くの奄美郷友会とは異なっていた。奄美郷友会はシマ（出身集落）ごとの小さな単位で組織されることが多かったが、ブラジルでは「奄美」という大きな枠組みの中で「親睦融和」を求め、シマや奄美大島内に限らず親睦を図る会が組織された。また、「ブラジル奄美会」と組織を改める際に、設立の主要目的を「会館建設」へと変更した。この点に「ブラジル奄美会」の大きな特徴がある。その会館建設を巡り「反対派」が居たにもかかわらず会を組織し、故郷奄美を巻き込んで建設費用を集め、半ば強引に会館建設を進めた。会館は反対派を抱えたまま落成したが、会は分裂し、最終的に会館は他組織に譲渡された。

Study of the Association of Amami Expatriates in Brazil

Abstract : It is a well-known fact that immigrants from the islands of Amami in southern Japan have formed *kyoyukai*, or compatriot associations, to support each other in building their lives in host countries.

The Association of Amami Expatriates in Brazil (Amamikai Brazil) is one such organization established in a country that's the farthest from the immigrants' hometown of Amami. This paper will take Amamikai Brazil as a case study in an attempt to shed light on the creation of this organization in Brazil, its approaches to passing on its culture to younger generations, and its eventual demise by analyzing photographs and video recordings taken in Brazil as well as interviews conducted there.

Brazil Amamikai is similar to other Amami expatriate associations in that its purpose of establishment, defined at the time of the establishment of its predecessor Amami Doshikai, was to promote friendship and bonding among its members. But it differed from many Amami compatriot

associations in several aspects. For example, while Amamikai are typically small social units formed by a group of people from the same *shima*, or community, Amamikai Brazil was based on a larger framework, bringing together people from the whole of Amami regardless of their *shima* origin or whether they were from Amami Oshima or other islands. Also the distinct feature of Amamikai Brazil is that its primary purpose of establishment was changed to “building an assembly hall” when Amami Doshikai was transformed into Amamikai Brazil. The organization was created despite the presence of a group people opposed to the building of the assembly hall. It then raised funding for the hall’s construction with help from their homeland, and aggressively pushed through the building project in defiance of opposition. Although the construction of the assembly hall was completed, Amamikai Brazil later split up and ownership of the building was transferred to another organization. The author of this paper succeeded in shedding light on the previously untold story of the creation and the demise of Amamikai Brazil through interviews in Brazil that revealed these details.

はじめに

奄美出身者が移住した先での生活を構築するために、同郷の者たちと「郷友会」を組織し、相互扶助を行ってきたことは、よく知られた事実である。⁽¹⁾

本論はその「郷友会」を、郷里である奄美から最も遠く離れたブラジルにおいて組織された「ブラジル奄美会」を事例に、移住先での奄美郷友会の形成過程と、そこで行われている文化継承について、現地で撮影された写真と現地での聞き取りを中心に分析を行い、その実態や特質を明らかにすることを目的とする。

(1) ブラジル移民史における郷友会研究

① ブラジル移民史における奄美移民研究

奄美からブラジルに渡った人々の研究については、先ず田島康弘による地理学的な研究が挙げられる。⁽²⁾ 田島は鹿児島県海外協会発行の『鹿児島県海外移住者名簿』や在伯鹿児島県人会記念誌、宇検村での聞き取りを基に、奄美で最も移民を送出した宇検村を中心に、移民の年別推移や入植とその後の生活について明らかにした。その後、宇検村役場所蔵の「宇検村長室保存文書」が整理され、この資料を基に宮内久光が近代期における宇検村からの移民について、その移動パターンと移動要因、プロセス等を考察し、宇検村には官民一体の移民送出システムが構築していた事を明らかにした。⁽³⁾ いずれもこれまで研究されてこなかった奄美の宇検村ブラジル移民の全体像を明らかにした優れた論文だが、依拠した資料や聞き取り調査は奄美内、特に宇検村内のものであり、奄美ブラジル移民の全容を明らかにしようとしたものではない。特に現地ブラジルでの調査は行われておらず、奄美側からの研究しか行われていない状況である。現在までにこの二つの研究を除いて奄美ブラジル移民に関する研究は他にない。

② ブラジル移民史研究における郷友会研究

入植地に相当数の日本人移民家族が集まると、やがて日本人特有の社会が出現する。「日本人会」

である。そこでは青年部や婦人会、それに日本人学校など様々な団体が組織され、彼らによって日本のムラ社会的な秩序や規制の下に管理、運営が行われる。日本人会とは、日本人集団移住地の自治組織なのである。この日本人会は、子弟のための小学校設立・運営の目的で組織されることが多かった。戦前の移住地は比較的同県人がまとまって配耕・入植していたため、同郷会としての性格も持ち合わせていた。国策として海外移住を推し進める政府により、各県に海外協会が設立され、移住の窓口となった。この県ごとの海外協会に現地ブラジルの状況を伝えるための団体が必要になった。こうして、各県人会がブラジルで設立された。県人会は、県庁との連絡を取る為の組織であり、県庁の「出先機関」としての性格を持っていた。県人会の規模や活動内容は多少の差があるものの、多くの県人会が自前の会館を持ち、そこで料理講習・歌や踊り等の文化継承活動が行われている。このような機能を持つ県人会は、そこでの文化継承やその変容について、民俗学や文化人類学研究の分野で研究がなされてきたが、県人会組織自体を対象とした研究はほとんど行われていない。

本稿で取り上げる奄美は、行政区分は鹿児島県大島郡となる。鹿児島県は最初のブラジル移民を乗せた「笠戸丸」から移民を送出していた。サンパウロのモルンビ地区には「鹿児島村」をつくるなど、ブラジル日本人移民初期から県人による集まりを活発化し、1913年鹿児島県人会を組織した。途中、休止していた時期があるものの、2018年には県人会創立105周年を記念する等、現在も活発に活動を続けている。その鹿児島県人会の関連団体として、かつて「奄美会」と「奄美校友会」という二つの「奄美」を名乗る会が存在した。ブラジルにおける、出身者による同郷組織である「郷友会」についての研究は、県人会研究以上にあまり行われておらず、現在までに確認できるのは沖縄系移民を社会学的研究として扱った山城千秋による「ブラジルの沖縄人社会再考」⁽⁴⁾のみである。本稿では、ブラジルにおける奄美郷友会に注目し、その組織的特徴と郷友会の持つ性格について、考察を試みることを目的としている。

(2) 奄美郷友会研究

奄美郷友会の研究は、地理学や社会学の分野から行われてきた。特に田島康弘により、関西や東京における郷友会の研究が行われている。その中で、郷友会の多くが、戦前から存在していた又はルーツを持っていたことや、戦時中の停止状態を経て、高度成長期前後に（再）発足する形で設立したこと等が明らかにされた。また、郷友会は、大部分が居住する地域を母体として発足しているが、その形態は、ゆるい寄り合い程度のものから、親睦会や青年団活動を中心とした“公事”を行うもの、故郷への送品のための集まり等様々であり、多彩な性格を持っている。このような郷友会のどの会にも共通する事項として「親睦」が目的として掲げられていたことや、都市に出てきた奄美出身者が都市社会に適応するための相互扶助としての重要な役割も持っていたことも明らかにしている。

しかし田島自身が「奄美の研究は一般に、奄美という地域内において行われる傾向が強く、奄美の外部での奄美研究の姿勢が弱かった」と指摘するように、現在までに奄美の外部地域で行われている研究は、移住地である関西地方や東京のものがわずかに存在するに留まっている。国境を越えた先の「奄美の外部」研究は、同じく田島によるアメリカ在住の奄美出身者についての研究でわずかに触れられているのみとなっている。⁽⁷⁾「奄美の外部」であるブラジルにおける奄美郷友会については『宇検村誌 自然・通史編』⁽⁸⁾でわずかに取り上げられている他、郷友会自体の研究はない。

I 奄美郷友会

本章ではまず、奄美郷友会について述べる。その後、奄美出身者にとって郷友会とはどのような位置付けにあるのかを探っていく。

(1) 郷友会

人々が都市移住する際に都市と村落の結節機能を果たすものとして「郷友会」と呼ばれる同郷団体が存在する。この郷友会は、同郷出身者同士の相互扶助の役割を持つほか、地方出身者である彼らが「都市化」する際に防衛的な「適応装置」としての機能を持つものである⁽⁹⁾。

(2) 「ヤマト」における奄美郷友会

奄美市では、2012年に発足した「奄美ふるさと100人応援団」と全国の奄美会をご紹介する趣旨で、『奄美ふるさと100人応援団名鑑』を作成した。現在、その冊子自体を入手することは難しいが、PDF版が奄美市役所HPに掲載されている⁽¹⁰⁾。そこで紹介されている「全国の奄美会」は21団体あり、東京奄美会から南は沖縄奄美会、海外ではUSA奄美会が掲載されている。全ての奄美会がHPなどを持っている訳ではないが、幾つかの奄美会のHPや筆者が実際に参加した奄美会（郷友会）を一覧にした⁽¹¹⁾。

奄美会と呼ばれる郷友会は、まず地域別に大きく分けることができる。北は東北奄美会から南は沖縄奄美会、そして海外奄美会がある。その地域別の奄美会の中に、下部組織として、各町村別の郷友会が存在する。そして、さらにその支部として各集落別郷友会や小学校校区別郷友会がある。また、中学校や高校等の同窓会も、この支部組織の一つとして存在する場合もある。郷友会は奄美会だけでなく、与論島出身者による与論会や沖永良部島出身者による沖州会も存在する。

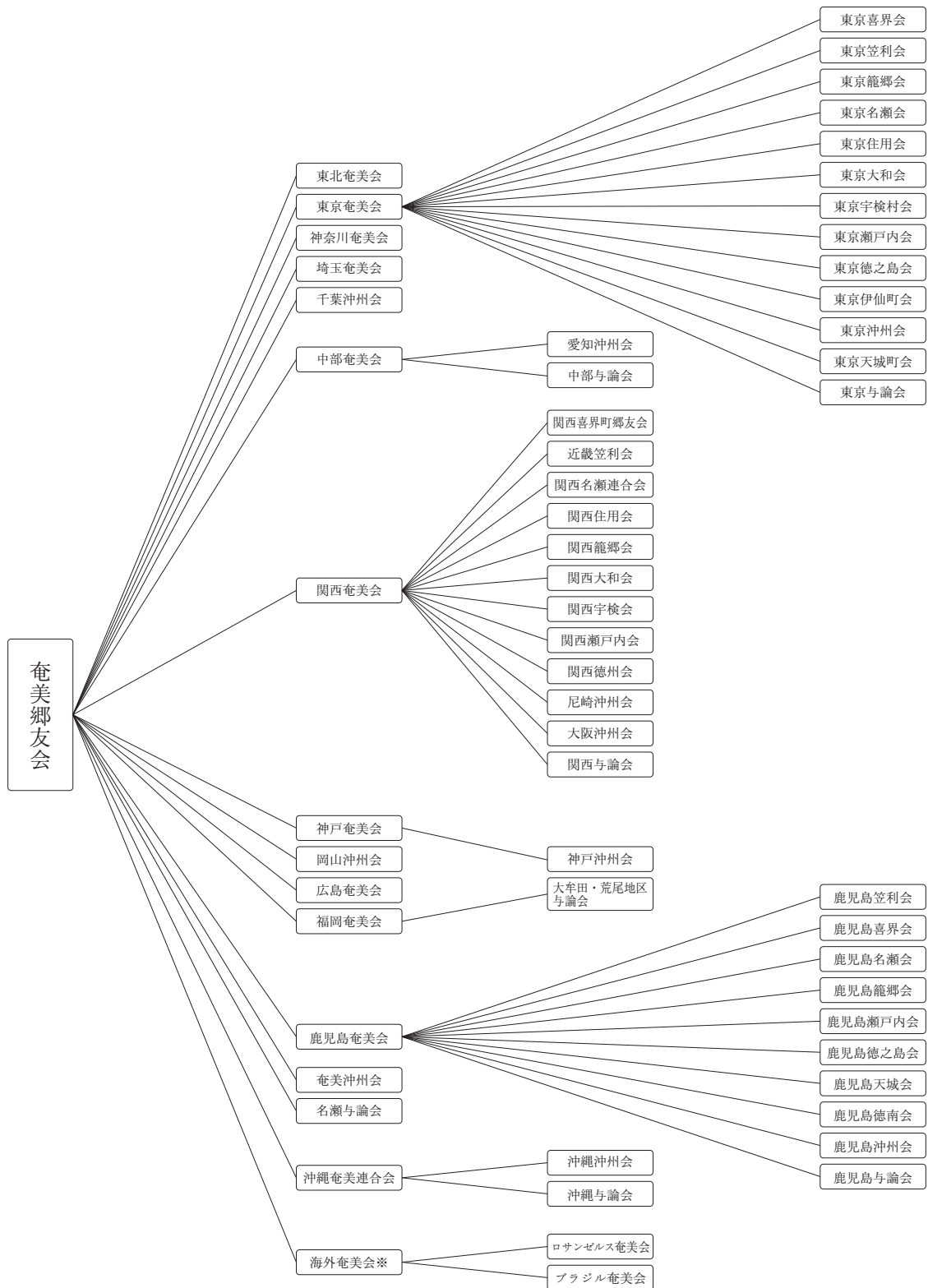
沖縄の人々も郷友会をつくるが、田島(2001)によると、沖縄系は「地域別の単位」もしくは「沖縄県人会」となるが、奄美は「出身集落の単位」により組織されることが多い。この「出身集落の単位」とは、市町村ごとだけではなく、出身集落（シマ）やさらには校区別にまで細かく分かれて組織されるのである。また、沖縄のように「県人会」という名称が付けられた会はない。

(3) シマから見る郷友会の存在

奄美では人口減少が深刻な問題となっている。人口減少は奄美だけでなく、全国的な問題なのだが、特に小さな島である奄美群島では、進学や就職のための島外への人口流出が止まらず、少子高齢化に拍車をかけている。島外へ出た者たちは、移住先で郷友会を組織する。組織された郷友会は「昭和三十年代までは、住居や仕事の紹介など、出郷者が都市での生活に適應できるよう、生活支援の役割も担うものだった。多くの郷友会が「総会以外に豊年祭・運動会・敬老会」を催し、「出郷者らの交流の空間を都市内において再現」する装置となっていた⁽¹²⁾。

一方で郷友会は都市と故郷のシマを結びつける働きも有していた。現在でも郷友会の総会には奄美から市町村長やその代理が出席したり、祝辞を寄せる。出郷者にとっては、郷友会に参加することで、シマとの関係を維持できる。そしてシマの状況を自分の目で確認することにより、結果的にシマ

図資料1 「奄美郷友会 地域別一覧表」



へのUターンに繋がるのだという。郷友会は「シマへの橋渡し」役としての機能を持つ。⁽¹³⁾

郷友会では総会以外に、唄者によるシマウタや踊り等の余興が行われる他、奄美の郷土食が振る舞われる。「東京練馬奄美会」では、出された食事は仕出しの弁当だったが、奄美の郷土菓子である「フティムチ／カシャモチ（草餅）」と「クルザタ（黒砂糖）」そして「ミキ（米発酵飲料）」も配られ、参加した奄美出身者たちは久しぶりの郷土の味を楽しんだ。⁽¹⁴⁾

奄美会の中には自前の会館を持つ郷友会も存在する。代表的なのが神戸奄美会の「神戸奄美会館」である。神戸市のJR長田駅側に建つ3階建ての会館は、2階に事務所とシマウタやサンシンを練習することができる教室があり、3階には総会等の際に利用できるホールがある。⁽¹⁵⁾ 反対に、会館を持たない小さな郷友会は、自治体等の施設を借りて会合等を催す。大島郡瀬戸内町芝集落出身者による「関東芝会」では、四十数年前から東京都大田区の池上にある徳持会館を借りて、毎年1回総会・慰安会を開催している。2019年5月26日に開催された総会・慰安会には、奄美の芝集落から地区長が来賓として招かれ、現在の芝集落の状況等を参加者に伝えていた。⁽¹⁶⁾

(4) 海外奄美郷友会

海外奄美会として先述の「全国奄美会」で確認できるのが、USA奄美会である。1975年、アメリカにおいて奄美会が誕生した。会の名前は「南カリフォルニア奄美会」。沖永良部出身者が中心となって結成した奄美郷友会である。⁽¹⁷⁾ 2017年には、ニューヨークでも奄美会が結成された。このように奄美出身者は、国内外を問わず、移住した先で郷友会を組織する。

II ブラジルにおける奄美郷友会

(1) 奄美ブラジル移住史

鹿児島県の南西約380キロに位置する、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島を合わせた奄美の島々から、1918年ブラジルへの集団移住が始まった。日本本土からブラジル移民が始まって、10年後のことだった。その後、戦前・戦後とあわせて、120世帯698人がブラジルへと渡った。奄美群島（以下、奄美）で最も多く移民を送出したのは、奄美大島の宇検村だった。⁽¹⁸⁾

(2) 同志会

『宇検村誌 自然・通史編』によると、ブラジルにおいて「奄美出身者の同郷団体である伯国奄美会が設立されたのは、昭和四十四年（一九六九）年十月五日であった」という。この「伯国奄美会」という名称は、ブラジルや現在の研究では「ブラジル奄美会」と記されることから、本稿でも「ブラジル奄美会」を用いる。奄美からブラジルへ移住が始まって50年という年月が過ぎ、同郷団体である郷友会が組織されることに不思議はない。しかし、なぜ、周年の節目でもないこの年に郷友会が組織されたのだろう。当時、奄美やブラジルで発行された新聞や記念誌などで報じられている奄美の人々の近況を伝える記事を基に、ブラジルにおいて奄美出身者の郷友会が組織されていく過程を見ていく。

1962年10月、「奄美同志会」と「家族慰安演芸会ならびに敬老会」という会がサンパウロ市イビ

ラプエラ公園内の日本館で開催された。この会にサンパウロ市内だけでなく「遠くは他州（マツト・グロソン、パラナ）一千キロ、二千キロからかけ参じ」た参加者もいた。ブラジルへ移民して「四十⁽²⁰⁾年ぶり、三十年ぶり」の再会を果たし、その後も演芸会や敬老会を催し、親睦が深められていた。

翌1963年、奄美からブラジルへの移住が始まって45年目の節目の年となるこの年の2月27日、サンパウロ市イビラプエラ公園において「奄美大島出身者の親睦融和の輪を広げ」ようと、奄美出身者が集まり会合が開かれた。この会の発起人は以下の9名であった。⁽²¹⁾

発起人：島純雄（宇検村、1931年渡伯）、直義実（宇検村、1925年渡伯）
 南清光（瀬戸内町、1925年渡伯）、本田西仁（宇検村、1930年渡伯）
 松田俊光（不明）、金井直三（瀬戸内町、1929年渡伯）
 友俊基（宇検村、1925年渡伯）、森岡義徳（宇検村、1930年渡伯）
 徳良雄（宇検村、1925年渡伯）

この会合で会の名を正式に「奄美同志会」とし、10月29日に「南米移住四十五年祭」を開催する事が決定した。ここでブラジル在住の奄美出身者の郷友会である「奄美同志会」が誕生するが、この時はまだ「ブラジル奄美会」とは名乗っていなかった。

1968年8月20日付の奄美地域の新聞「南海日日新聞」では、「37年ぶり郷里へ“今浦島”⁽²²⁾ブラジルの島さん」という記事が掲載され、ブラジルから帰国した奄美出身者の近況が報じられた。内容は、1931（昭和6）年18歳でブラジルへと渡った島純雄氏が37年ぶりに奄美に戻り、旧友たちと旧交を温めたというものだが、そこに島氏の肩書きとして「在伯奄美同志会会長、在伯鹿児島県人会第二副会長」と書かれている。これによると、この当時の奄美同志会の会長は島氏であったことが分かる。さらに記事には「ブラジルには現在約千三百人の奄美出身者がおり（中略）年に一回集まって慰安会を開き、郷土のことなどを語り合」っている」とあり、同志会の活動の様子が分かる。

(3) 奄美会設立

年に一度の慰安会を開いて出身者同士の親睦を深めていた奄美同志会内だったが、さらなる「親睦融和伝統文化の継承」と「お互いの心のよりどころとして寄り合う」ためにと、会の中で会館建設を求める気運が高まった。そこで、1968年サンパウロ市カーザヴェルデ区に「ロッセ（住宅予定地）」を購入した。しかし、その後奄美大島出身者が集住している地域であったヴィラカロン区に「適当な土地⁽²³⁾」が見つかり、会館の「買い替え」が検討される。この「買い替え」にあたり、まだ生活基盤も整っていなかった戦後移住者（新移民）にも「一定額の月払い積み立て金」が負わされた。そのため計画段階から建設に「反対」する者もいた。

III ブラジル奄美会

(1) 設立経緯

1964年から年に一度の慰安会を開き奄美出身者同士の親睦を深めてきた奄美同志会は、5年後の

1969年4月27日、その名称を「ブラジル奄美会」と改めた。このときの会合はサンパウロの友直広氏自宅にて開かれ、「会の第一目標」としてサンパウロ市内に「奄美会館」を建設することを掲げた。

こうして奄美同志会が「ブラジル奄美会」と改称し新たな郷友会として発足した。当時ブラジルには、戦前からの移住者を含めて250世帯がおり、その大半がサンパウロ市近郊で生活していた。そのほとんどは宇検村出身者であったが、「ブラジル奄美会」発足にあたっては、「名瀬出身者が中心」となり、各役員が決定した。⁽²⁴⁾

「ブラジル奄美会」役員

会長	友広三	副会長	森岡義範	金井直三		
執行部	直義実	重野堅	寺師守一	斎藤齋人		
会計	重井秀仁	松井信輝				
会計監査	島純則	里村豊熊				
相談役	里小吉	石清吉	徳元彦	本田西仁	南清光	松田敏光
理事長	島純雄	副理事長	長里秀則	藤田恭久		
常任理事	河内可一	友直広	島田岩彦	津田三矢	錦義継	豊川実義
	山田愛治	福島重次	文岡勝	渡義秀	貞野鎌生	豊川章
	高田義文	前田国人	森岡末人	平高	小林源蔵	能勢貞常
	佐々木重悦	岡田才蔵	元南佐栄	久保領生	富永一則	
	島永時雄	玉利重広	藤村島健	善忠造	高田基治	徳良雄
	川畑勲	貞野岡平	山田博道			

ブラジル日系社会では各県人会ごとに自前の会館を持ち、そこで会員の冠婚葬祭や新年会・忘年会等が開催されていたが、奄美出身者が集まる行事では、他県人会館を「賃貸料を払い借りて」催すという実状があった。⁽²⁵⁾「会の第一目標」が「奄美会館」建設となったのは、このような背景があった。

まだ「奄美同志会」と名乗っていた頃、「親睦融和伝統文化の継承」と「お互いの心のよりどころとして寄り合う」ために、サンパウロ市カーザヴェルデ区に「ロッテ（住宅予定地）」を購入したが、「ブラジル奄美会」では、そこを利用せず、より奄美大島出身者が集住している地域であったヴィラカロン区に「適当な土地」が見つかったと、会館の「買い替え」が検討された。カーザヴェルデ区は会員の居住地から距離があり、利用するのに交通が不便だったため、多くの会員が住んでいるヴィラカホン地区に会館購入を求める声が出たのではないだろうか。

「ブラジル奄美会」は、このヴィラカホン区での会館建設のために発足したと言っても過言ではないだろう。会発足時からすでに会員には等しく「積み立て金」が負わされ、会館建設に向けて動き始めていた。しかし、世帯数が「二百数家族」では「手に負えず」、この後、故郷奄美に協力を仰ぐこととなる。

「ブラジル奄美会」が発足して2カ月半が経った7月15日、常任理事と執行部の顔合わせのための会合が開かれた。会合では、その年のサンパウロを襲った「降霜」被害者への御見舞いも行われた。

翌8月9日には、新ときわ食堂にて会合が開かれた。「ブラジル奄美会」の役員が一堂に会した。

同月 31 日には「ブラジル奄美会」の第 1 回集会に向けて「拡大役員会」が開催された。この時、10 月 5 日にブラジル奄美会主催の第 1 回集会開催する旨の通知を行うことが決議された。この第 1 回目の記念すべき会となった「第一回敬老会・家族慰安演芸大会」は、ヴィラカホン区の「沖縄協会会館」(ファ ビリシーノ街 618 番地)を借りて行うことになった。これまでの会合でも、奄美出身者たちは沖縄県人会の持つ会館を借りることが多かった。この「第一回敬老会・家族慰安演芸大会」は当日の参加人数 1000 人が見込まれ、150 の余興を含めたプログラムが計画された。⁽²⁶⁾

(2) 「第一回敬老会・家族慰安演芸大会」

1969 年 10 月 5 日、ヴィラカホン区の沖縄県人会館において「ブラジル奄美会」主催の「第一回敬老会・家族慰安演芸大会」が開催された。会は、1000 余人が集まり「空前の盛況」となった。友広三会長の挨拶の後、ヴィラカホン体育協会長の中矢太吉氏、野田次平氏などの市議ら来賓による祝辞は「大ヒット」し、参加者からは「鹿児島県人会の分家だが本家より賑わい分家が本家昇格できる」という声も上がった。⁽²⁷⁾

IV 奄美会館建設

(1) ブラジル奄美会館建設計画

「奄美同志会」の頃から奄美出身者たちの悲願であった「奄美会館」建設のために「ブラジル奄美会」は発足した。最初の集会である「第一回敬老会・家族慰安演芸大会」でも「ブラジル奄美会館建設基金」への悲願が語られた。

「現在ブラジルで働いている方は二百五十世帯で会館建設者には協力者(奄美外)も入会してもらい強力な組織体に成長させる主旨とより処「[ママ] 他府県や沖縄会館はすでにでき上がっているが奄美出身の交流機関がない、結婚式には他府県会館を借用が現状、二世や三世への故郷の奄美～培養施設と会員の交流機関」

として、何が何でも会館が必要だという。そこで、ブラジルだけでなく祖国日本でも全国的に「一人百円運動の募金」協力を仰ぐ計画が立てられた。⁽²⁸⁾

6 月 15 日発行のサンデー奄美(第 45 号)にさっそく、「ブラジル奄美会館建設募金“故郷の奄美と二世三世の交流の場を”一人百円募金に皆の心で支援しよう」との見出しで「ブラジル奄美会」と会館建設への協力を読者に呼び掛ける記事が掲載された。

(2) ブラジル奄美会館建設基金

① 「一人百円運動の募金」

サンデー奄美は 1969 年 6 月 15 日発行の第 45 号紙面において「ブラジル奄美会館建設募金“故郷の奄美と二世三世の交流の場を”一人百円募金に皆の心で支援しよう」との見出しで「ブラジル奄美会」と会館建設募金活動を大々的に報じ始めた。奄美大島の名瀬市では山田米三氏(土産物店社長)

と元山春光氏、前田信一氏らが世話人となって、大島支庁・市町村長会・名瀬市へと募金運動が展開されていった。同年11月1日発行のサンデー奄美（第49号）では、「奄美会館建設に浄財100円を全国募金中」との小見出しを付け、全国的に「一人百円運動の募金」を宣伝した。募金運動は「100円浄財運動」とも呼ばれた。集められた募金の送金先について、「サンデー奄美」あてにご送金くださればブラジル奄美会への送金事務を承ります」と、サンデー奄美自らが、日本国内での募金窓口となった。⁽²⁹⁾そして、翌1970年3月15日発行の紙面で「ブラジル奄美会館建設基金」に東京都在住の奄美出身者である矢野直氏から「預託第一号（金100円也）」が届いたことが報じられた。⁽³⁰⁾

1971年1月3日発行の第62号紙面では、募金活動の世話人の一人である名瀬在住の山田米三氏が「私がみたブラジルの奄美人」という旅行記を寄稿した。⁽³¹⁾寄稿文は「ブラジル奄美会館建設へ皆さまのご後援を」という小見出しが付けられ、

「沖縄県人の発展ぶりにくらべ歴史の浅い奄美人は立ちおくれの感がある。すでに沖縄県人会は方々に県人集会所が出来ており、平家づくりの公会堂で逆に奄美人が恒例会には借りうけて会を開いているのが現状。」

「奄美の一世達は自分らが元気な間に「自分たちの苦勞した歴史を綴り後輩たちを教育するための郷土館を何とかして作りたい。その中で奄美人の安息所たるべきものを残そう」と努力奔走中です。」

と沖縄県人会と比べた奄美会の状況が紹介され、最後には「皆様のご後援切に願います」と、読者に訴えた。世話人たちもまた、活発な募金活動を展開していた。こうして、サンデー奄美は「ブラジル奄美会館」の関連記事を積極的に掲載し、建設を全面的にバックアップする主要媒体となっていく。

1971年4月4日発行の第65号には「ブラジル奄美会館設立委員名」が掲載された。そこに記されていたのは以下の者たちである。⁽³²⁾

「ブラジル奄美会館設立委員名」

委員長	友広三（宇検村湯湾二世）
副委員長	直義実（宇検村湯湾出身一世）
同	里秀則（宇検村久志出身一世）
総務	藤田恭久（湯湾）、重井秀仁（名瀬） 津田二夫（久志）、斎藤斎人（名瀬）、島永時雄（管純）
会計	寺師守一（名瀬）、島田岩彦（芦検） 河内可一（湯湾）、藤村島肇（湯湾）、文岡勝（生勝）
委員	島純徳（芦検）、本田和久（田検） 金井直三（篠川）、南清光（管純） 善忠蔵（名瀬）、高田義友（湯湾） 肥後英樹（笠利）、田中繁行（笠利）

能勢貞常（湯湾）、直義一（湯湾）、貞野謙生（湯湾）
 松井信輝（芦検）、豊川真愛（湯湾）
 友直宏（湯湾）、山田愛治（湯湾）
 藤野博美（湯湾）、横山和男（名瀬）
 福島重次（湯湾）、貞野岡平（湯湾）
 能勢弘（湯湾）、渡義秀（湯湾）、能勢一男（湯湾）
 監査 里小吉（久志）、重野堅（名瀬）
 島純雄（芦検）、本田西仁（田検）
 石清吉（石原）、森岡義範（田検）
 徳元彦（湯湾）、松田年三津（鹿児島市）

1970年には、「30回払いで、サンパウロ市に幅15メートル奥行40メートル（600平方メートル）の土地を時価320万円で購入し、毎月10万円位の月賦で支払っております」とあり、すでに土地の購入を終え、月賦での支払いも始まっていた⁽³⁴⁾。1973年8月5日には「奄美会館建設委員会」を開催し「15米／40米」の敷地に「設計通り施工」されることとなった。現場監督として友直宏氏と里秀則氏が任命され、建設計画が進んだ。年末には「竣工」が予定され、「会館を立派に建設しよう」を「合言葉」に故郷奄美や関連機関への募金の呼び掛けにますます励んだ⁽³⁵⁾。

1975年2月13日付の奄美会からの便りで奄美会館建設の進捗状況が伝えられた⁽³⁶⁾。

「夏の盛りの中で一期工事が完了、現在は二期工事で屋根（スラブ鉄筋コンクリート）工事を進めているという。現在までの工事と二期工事で一千五百万円が費やされ、三期工事には一千万円が足りない状況だと言う」

さらに、8月3日には、二期工事（屋根のスラブ鉄筋コンクリート）も終了したが、三期の「窓枠ガラスから内装全般」の施工が資金難のため頓挫してしまった。そのため、7月5日から直義実氏、寺師守一氏が再来日し、奄美だけでなく沖縄・鹿児島・関西・東京と募金行脚を行った。特に山下量加氏が陳情した「県の助成金」も再度請願を行ったことが報じられた⁽³⁷⁾。

資金繰りに目処が立った1976年5月下旬、ブラジル奄美会からサンデー奄美宛てに会館建設の進捗について、会館は6月末竣工し、9月には開館式が行われる予定という報告がなされた。中断されていた工事が再開し、完成の目処も立ったのであった⁽³⁸⁾。

② 日本における募金活動

1972年9月17日から鹿児島県で開催された「太陽の国体」にブラジル奄美会から12人が参加した。ブラジル鹿児島県人会の企画した訪日団の一員としての参加だったが、この訪日を活かし滞在中に奄美会館建設基金への募金活動を行った。直、重井、寺師ら「ブラジル奄美会館建設委員会」の3氏が、建設募金を大津鉄治市長、朝山玄蔵町村長らに陳情請願を行い、東京・関西・鹿児島奄美会を通じて、各会員に向けて募金活動を展開した⁽³⁹⁾。

1971年3月に紙面で、2月20日時点で名瀬市の奄美大島自治会館に送金されている「ブラジル奄美会館建設募金」が合計44万9千315円になったと報じられた。⁽⁴⁰⁾

1974年5月23日には、関西奄美会の顧問会が大阪駅前の中華料理屋りゅうたんで開催された。その顧問会に、一時帰国中の山下量加氏が参加していた。山下氏はブラジル奄美会「顧問」として、ブラジル奄美会建設募金への協力を仰ぎ、「一部有志だけでなく全郷友会員から広く募金を行う」約束を取り付けた。山下氏は鹿児島奄美会と東京奄美会にも募金協力を呼び掛け、精力的に活動を行った。⁽⁴¹⁾

1975年8月、一期工程が完了した会館建設であったが、現在までの工事と二期工事で1500万円が費やされたとサンデー奄美が報じた。ここまでの建設資金は直、寺師氏が初来日時に集めた「浄財」約600万円と各会員の寄付、さらには友広三氏が銀行から「個人借入」した500万円などを含めた総額1500万円（当時のブラジル貨幣で37万クルゼール）であり、これがすでに使い果たされてしまった。しかも、三期工事にはさらに1千万円が足りない状況だと言う。そこで直氏と寺師氏は再来日し、再び募金活動を行った。⁽⁴²⁾ 再来日の募金活動では、山下氏が母県である鹿児島県に陳情した「県の助成金」を当てにしていた。当時の金丸知事からは「心よく協力の言葉をいただ」けた。助成金を受けるため、在伯鹿児島県人会の同意書を作成する必要が出てきた。その同意書作成を友広三奄美会長が、在伯鹿児島県人会長の大原春二氏らに相談したところ、大原氏側から「17人の役員中7名の相談役しか集まらず奄美会館建立へは同意しない」との私信が県へ発送された。これを受けた県からは、助成を「暫く見合わせる」と奄美会側へ回答があった。頼みの綱の助成金を「切られ」、建設工事は中止に追い込まれた。山下氏ほか奄美会員は、これを大原氏の「個人的放言」として憤慨した。奄美会は「大きな損失」を受け、県知事へ実情を訴える公信を送った。県から再びあった回答は「しばらく冷却期間を置く」という冷たいものだった。⁽⁴³⁾

1975年9月7日付のサンデー奄美に「ブ奄美会館建立で県知事へ笠井県議が請願中」という見出しで県への請願続報が掲載された。大島市町村会では、大津鉄治名瀬市長や手島斉氏、朝山玄蔵町村会長、松元辰巳宇検村長などの奔走により「郡民一人当たり35円平均で合計536万円が再度の補助金助成で決定」した。

当時、ブラジル鹿児島県人会では母県より毎年100万円の助成金を受けていた。奄美会館より先に鹿児島県人会館建設計画が立てられ、敷地の購入も実現したが、実現に至っておらず、「草地のまま放置」されていた。一足先に奄美会館建設助成が決まってしまうと、現在行われている助成金が停止するのではないかという思惑もあるのではという意見も出ていた。

このブラジル鹿児島県人会と奄美会の関係だが、ブラジル奄美会は団体としてブラジルで正式に認可を受けた組織であった。位置付けとしては、ブラジル鹿児島県人会の下部組織の一つであったが、正式に認可を受けた団体という自負もあり、奄美会側は鹿児島県人会に対して「絶大なる協力」を行っているという気持ちがあった。そのため鹿児島県人会の「反対」は奄美会には到底受け入れられない話であった。

一方ブラジルでは、友広三奄美会長が猪畑政義新県人会長へ助成金凍結の事情を説明したが、「私は新任2ヶ月めなので前役員達に対して具合が悪いので貴殿方での運動を願う」と撥ね付けられ、再び冷たい対応を受けていた。そこで山下氏は大原前会長へ再び直談判を行うなど、さらに活発に活動

を行っていく。⁽⁴⁴⁾

その頃鹿児島では、笠井県議が知事への請願を行っていた。また南米視察を行いブラジル奄美会で手厚く歓迎を受けた宮之原参議院議員が9月25日に開催された東京奄美会で「ブラジル奄美会館建設の現状と意義」を報告し、永野芳辰東京奄美会長の発言で有志の建設募金委員会「ブラジル奄美会館建設 協力関東実行委員会」が結成され、宮之原議員が委員長となった。このとき宮之原議員の相談を受けた永野東京奄美会長は、金丸知事と対談を行った。そこで、冷却されている県助成500万円を早急に解決し助成実現へ向けて話し合いが進んだ。⁽⁴⁵⁾

1975年12月22日、東京の料理屋菊水本店で「ブラジル奄美会館建設 協力関東実行委員会」が開催された。宮之原貞光参議院議員と山元速雄東京奄美会幹事長が座長を務め、「残り不足分」の500万円を関東・関西で集め「ブラジル同胞の永い間の悲願である夢を実現させてあげるよう」協力を求めた。この会で各市町村郷友会長が実行委員会となることが提案され、出席した市町村会代表らが「全員了承」した。そして事務として山元氏が募金会計責任者となり、会計監査を古賀貞芳氏、麻井照雄氏、竹田行利氏、屋宮誠道氏の4氏に決定した。そして各会ごとに趣意書付きの「奉賀帳」を配り、2月末までに残り不足分を集めることを決定した。すでに「大口」の寄付申し込みも出ていた。関東でこのような運動が起こっている頃、すでに関西奄美会でも「一足先」に募金運動は「強力にすすめられ」ていた。⁽⁴⁶⁾

1976年2月末、会計責任者の山元氏の元に総額「95万2千円」の寄付金が届いた。内訳は個人が12件、郷友会は8つの会から寄付があった。中でも最も高額な寄付をした郷友会は、移民を一番送出した宇検村会で15万5千円を計上していたが、さらに4月に予定している総会で寄付をまとめあげ総額40万以上にしたいと意気込んでいた。⁽⁴⁷⁾ こうして、1976年5月7日に再び東京で開催された「ブラジル奄美会館建設 協力関東実行委員会」で監査が行われ、その後の追加の寄付もあり、5月21日の時点でブラジルへの募金が303万4千円となった。⁽⁴⁸⁾

1978年1月1日、資金不足で途中工事の中止もあったが、約7年の月日を費やして建設された「ブラジル奄美会館」が竣工した。この日、新年祝賀会が催され、紅白歌合戦などをして盛り上がった。同月29日には総会が開かれ、落成式を6月11日に開催することが決定した。「奄美出身者の悲願」であった会館が、ここに完成した。⁽⁴⁹⁾

(3) 落成式

1978年6月11日午前10時から「ブラジル奄美会館」で会員460人が出席し「ブラジル奄美会館竣工落成式と奄美出身者移民60周年祭典」が開催された。

落成式にはブラジル国下院議員ほか、日本からもサンデー奄美の森村主幹ら大勢の来賓が参加し賑わった。表彰式も行われ、功労者や敬老者（70歳以上の38名）へ記念品の湯飲みが贈呈された。

会館の全容は「敷地が五百平方メートル、建物三百五十メートル平方、鉄筋二階建てで幅8メートル半、高さ5メートル90センチ、奥行35メートル。舞台7メートル×8メートルで後部が支度部屋で大鏡付き。別棟管理室50メートル平方二階建てで一階が炊事場（婦人部の料理講習を兼用）、便所は婦人用3ヶ、男が1ヶ所で数人同時に使用可。収容人数は五百人で建設費用は日本円で三千万円。その他は奉仕作業と会員の寄付金など数字では計算できない「原文ママ」ほど、豪華な会館で

⁽⁵⁰⁾ あった。会館は建造時から数度の増改築を行っているが、現在も建物自体はほぼそのままの形で残っている。内部も舞台や支度部屋はそのままの状態に残されている。

(4) 会館で開催された催し物

サンデー奄美には、ブラジル奄美会から「便り」が届いており、度々紙面で紹介されている。その記事を見ながら、会館で催されていた行事を見ていく。

① 会館が建設される前の行事

「ブラジル奄美会」が発足する以前より、奄美出身者たちはことあるごとに集い親睦を深めてきた。1963年8月13日付の大島新聞では「ブラジル移民45周年 先営者たちに大島支庁長賞 故郷の写真や声送る」との見出しで、「奄美大島移住四十五周年祭典」開催に合わせ、ブラジル在住の奄美出身者たちに大島支庁長賞が贈られることが報じられた。⁽⁵¹⁾

記事によると、1918年から始まった奄美ブラジル移民は、「八百人余り」が渡伯したが、現在ではサンパウロ市を中心に「33人が残っているだけ」であるという。いずれの人物も「一応の地位を築いているが、これらの人々が集って在伯奄美同志会」が同年2月27日に結成され、10月29日に移民45周年祭を催すこととなった。この33人には表彰状と記念品として「復帰後の奄美の写真集」などが贈られることになったという。この新聞報道の前日12日の船便にてブラジルへ送られた。

この時、表彰されたのは、有川キサマツ（西古見）・川畑チヨマ（芦検）・川畑隆二（芦検）・名ボウ（名柄）・野又ツネチヨ（名柄）・名福寿（名柄）・村範〇（湯湾）・島島悦（芦検）・島ウメヅル（芦検）・島純雄（芦検）・石神清（湯湾）・藤九熊（湯湾）・辰実良（須古）・元源千代（旧東方村久根津）・直〇宗（湯湾）・倉元英彦（芦検）・前田園人（芦検）・島竹千代（芦検）・植田ハナ（湯湾）・伊元マツ（芦検）・国アミマツ（芦検）・藤田政茂（古仁屋）・藤田ヨシ（古仁屋）・天野オカエ（湯湾）・有川サチ子（古仁屋）・渡坊（湯湾）・渡広純（芦検）・渡ウキノ（芦検）・清武夫（名柄）・清高（名柄）・藤恒基（古仁屋）

記事では「33人が残っているだけ」とあるが、当時サンパウロ市近辺に住んでいるものは少なく、ほとんどがサンパウロ州の「奥地」にいたため、記者や行政も把握できなかったのだと思われる。

また、『大琉球写真帖』には、奄美ブラジル移民に関する写真が5枚程収められている。⁽⁵²⁾ これらの写真は、当時名瀬市に住んでいた山田米三氏が提供したもので、山田氏の姉ギンヅルが移民先のブラジルから弟に送った写真である。この内の1枚に、「奄美大島移住45年祭、姉の友ギンヅル夫婦が参加」という題名が付けられた写真がある。写真には20名の男女が写っており、前列に座っている人々が手に四角い箱のような物体と筒状に丸まった書状らしき物を持っている。これが先の記事に記されていた記念品と賞状なのであろう。表彰者は33人いるはずだが、実際に写真に写っているのは20人であった。

2019年2月、筆者はこの写真をサンパウロ在住の友米三氏の姪に当たる人物に見せて、知っている人物がいるか尋ねたところ、前列左から3人目が「トヨカワ」という名前であったことと、同じく前列左から4人目の女性が「友チヨツユ」という名前で、自分のオバだと教えてもらった。しかし、「トヨカワ」も「友チヨツユ」も表彰者一覧に名前がない。表彰者の配偶者として代わりに記念品と

賞状を授与されたのであろうか。写真に写っている人物については、今後も⁽⁵³⁾ 検証が必要である。

さらに友米三氏提供写真の1枚に「昭和40年2月29日 鹿児島県人会主催の祝賀会で演ずる奄美出身者の子弟」という題名が付けられた写真がある。この写真に写っている「水兵」の衣装を着た人物の特定はできなかったが、この後の移住75年周祭でも同じような演目を見ることができる。奄美出身者の会では人気の演目であったのか、または当時のブラジルでの流行であるのか、いずれも他の県人会や催しの記録とあわせて今後も検証が必要で⁽⁵⁴⁾ ある。

1970年7月には「第一回家族慰安運動会」が開催された。運動会では「男女老若がありし日の島の小学校々庭を想い出しながら、和気あいあいの中に、日頃鍛えし腕前を四チームで競い」⁽⁵⁵⁾ 合った。

翌1971年7月18日には「第2回家族慰安運動会」が開催された。運動会の開催場所は、会館近くの「ピラカロン日本文化協会運動場」を使用した。会館には運動会を開けるほどの広さをもつ運動場はなかった。運動会では参加者を居住地別に4チーム（ヴィラカホン・カーザヴェルデ・ジャバクワラ・インダイアツバ）に分けて競い合った。昼食時には大島実高卒業生たちによる「闘牛大会」⁽⁵⁶⁾（宇検村対名瀬市）も催された。また、同年10月には「青少年フットボール大会」、元旦には「家族会」も開催されるなど、奄美会はますます盛り上がりを見せていく。

1972年1月30日ブラジル奄美会の「総会」が開催された。総会では友広三会長が再選され、新役員も選出された。規約改正も行われ、役員任期が1年から2年になった。新事業も決議され、新たに4月開催の各地区対抗フットボール試合（4月30日オーリョパカエンブー敷地内）と、7月23日開催の第3回運動会（前回と同じ運動場）、9月太陽の国体参観のため母国訪問団「送別会」を9月3日⁽⁵⁷⁾ オーリョパカエンブー敷地内で開催することが決まった。

1973年5月、フットボール大会が開催され、少年と青年に分かれ「奄美会長杯」争奪戦を行った。大会には約200人が参加した。1973年7月15日には「第4回家族慰安運動会」が開催された。恒例となった運動会は、引き続きヴィラカホン区の沖縄県人会所有の運動場で行われた。運動会では⁽⁵⁸⁾ 39種目のプログラムが行われた。このように年間の行事として4、5月のフットボール大会、7月には運動会、他にも敬老会や芸能大会、年末には忘年会、元旦には新年祝賀会が催され、1月末の総会



写真1 「奄美大島移住45年祭」(昭和38年頃)



写真2 「鹿児島県人会の祝賀会で演ずる奄美出身の子弟」(昭和40年)

をもって次年度が始まるという行事のサイクルが確立された。

② 会館落成後の行事

1978年6月11日の「ブラジル奄美会館竣工落成式と奄美出身移民60年祭」開催以降、奄美出身者の集いはこの会館を使用して行われるようになった。同年7月から8月頃になると、ブラジル奄美会の事務局長であった直義実氏を中心に、「シマウタ同好会」が結成された。これより月1、2回ほど「ウタとサンシンの稽古」が会館で開催されるようになった。⁽⁵⁹⁾

1982年8月8日に開催されていた「敬老会」には、宇検村出身の益岡豊氏の兄進氏も参加して会は賑わった。進氏は弟豊氏を訪ねてブラジル訪問をしていたところだった。⁽⁶⁰⁾

1983年、時期は不明だが「ブラジル奄美会館落成5周年」の記念式典が開催された。⁽⁶¹⁾ 会館落成の周年祭も開催され、事あるごとに奄美出身者たちが会館で集っていたことが分かる。他にも、1984年8月5日には、泉重千代さんが満119歳を迎え、日本国内で話題となっていた。もちろんブラジルにもそのニュースは伝わっており、ブラジル奄美会では「泉重千代翁・満119歳・御誕生祝賀会」を開催している。⁽⁶²⁾ また、この頃毎月1回（第1日曜日）「親睦会」が開催され、そこでは頼母子講や衛生講話、カラオケ、シマウタや舞踊の稽古などが行われていた。⁽⁶³⁾

③ 奄美大島移住70周年記念式典

1988年10月16日、鹿児島県人会創立70周年記念式典が開催された。同日の夜、奄美の人々も「宴」を開催した。主催は「奄美交友会」、会長は高田基春（宇検村出身）となっており、すでにこの時点で奄美出身者のブラジル奄美会とは別の組織である「奄美校友会」が存在していた。⁽⁶⁴⁾

同年10月22日、「在ブラジル奄美交友会」主催で「第一回移住者70周年記念式典」が開催された。この式典は奄美会館では開催されず、沖縄県人会館を借りて、鹿児島県人会を後援に擁して開催された。1988年のこの大きな二つの行事を「ブラジル奄美会」ではなく、「奄美交友会」が主催者となるほど、「奄美交友会」は組織力をつけていた。奄美の郷友会は、いつの間にか二つに分裂し、いつの間にかその力関係は逆転をみせていたのだ。⁽⁶⁵⁾

④ 奄美大島移住75周年記念式典

1994年4月24日、サンパウロのヴィラカホン区にある「日伯文化体育会館」で「奄美大島移住75周年記念式典」が「奄美交友会」（高田基治会長）主催で開催した。奄美からも宇検村の元山三郎市長ほか職員2名がブラジルへ赴き、代読で大島支庁や瀬戸内町長、天城町長らの祝賀メッセージを読み上げた他、移住75年の人々と75歳以上の敬老者45名に記念品を贈った。会の司会進行は笠利出身の肥後英樹氏が行った。使用言語は日本語だったが、ブラジル生まれの二世など多かったため、ポルトガル語の司会役に宇検村二世の文岡正樹氏が登用されている。開会の辞の後、「開拓先没者への一分間の黙禱」「日伯国家斉唱」来賓挨拶が続き、「奄美交友会」「在伯鹿児島県人会」「在伯奄美会」それぞれの会長の挨拶があり、敬老者への記念品贈呈を経て、「祝賀アトラクション」そして盛りだくさんの余興が行われた。終演は「島と同じく六調」で締めくくられた。そこには「明治の頃の奄美方式が色濃く表現されていた」という。⁽⁶⁶⁾



写真3 「おどりまつり映像集」玉利氏より



写真4 「奄美大島移住 75 周年記念式典」



写真5 「奄美大島移住 75 周年記念式典」



写真6 「奄美大島移住 75 周年記念式典」



写真7 「奄美大島移住 75 周年記念式典」



写真8 「奄美大島移住 75 周年記念式典プログラム表紙」

写真3の「おどりまつり MELHORES DANCA DE 1994~1998」という映像集（DVD）は、踊りの練習用として、これまでの催し物の中から踊りだけを抜き出して作成されたものである。⁽⁶⁷⁾制作したのは宇検村二世の夫（沖縄出身）である。そのDVDを妻の姉夫婦（DVDに表記されているHATSUKO SAN e SHIGUEHIROが姉夫婦の名前である）に「記念」として渡すため複製したものである。この映像集を姉夫婦のHATSUKOさんのところで見せてもらっていたとき、筆者にも、と複製を作成してくれた。

この映像集の内容は大きく分けて10の章に分かれている。映像の総時間数は2時間6分59秒。先の「奄美大島移住 75 周年記念式典」の写真は、その映像から筆者が静止画を撮影したものである。

以下に、その映像記録集の内容を記す。

図表2 「おどりまつり映像内容」

	行事名	日付	場所	内容	映像時間
1	奄美大島移住 75 周年祭	1994/04/24	奄美会館	楽屋から始まり舞台へ。計 9 演目所収	約 30 分
2	祝敬老会	1995/03/13	奄美会館		約 18 分
3	鹿児島県人家族慰安演芸大会	1997/08/28	不明	「島育ち」	約 12 分
4	第 2 回級集ブロック親睦芸能大会	1997/11/09	不明		約 10 分
5	第 30 回家族慰安演芸会	1998/09/27	不明	「島育ち」「月の白浜」	約 8 分
6	奄美ブラジル移住 80 周年祭	1998/10/08	奄美会館	「六調」	約 7 分
7	ブラジル鹿児島県人 85 周年祭	1998/10/11		「島育ち」	約 20 分
8	UNDOKAI	不明	沖縄協和会館	「浪花節だよ人生は」	約 20 分
9	不明	1994/04/25	不明	「六調」	約 6 分
10	奄美大島移住 75 周年祭	1994/04/24	奄美会館	「炭坑節」	約 6 分

おどりまつり映像で注目すべきは、最初に記録されている「奄美大島移住 75 周年祭」の映像である。計 9 演目が記録されており、予定されていたアトラクション・プログラム順に①「加計呂麻音頭」②「丘を越えて」③「南部坂雪の別れ」④「三百六十五歩のマーチ」⑤「汗水節」⑥「月の白浜」⑦「お座敷小唄」⑧「二人酒」⑨「平成音頭」となっている。

その中の⑤「汗水節」という演目は、沖縄民謡「汗水節」と同じ題名だが、曲を聞くと奄美シマウタの「稲すり節」である。プログラムによると、この演目を演じたのは「婦人松井ノエ外」となっていた。松井ノエ氏は宇検村芦検の出身である。

奄美では、シマウタは各シマ（集落）ごとで歌い継がれており、同じ曲名でも各シマによって節回しや歌詞が少しずつ異なる。松井ノエ氏の出身地である宇検村芦検集落に伝わる「稲すり節」は、「芦検稲すり踊り」と呼ばれており、村指定無形文化財になっている。

「芦検稲すり踊り」は、1938（昭和 13）年の新嘗祭において、神々に供える米の栽培地として芦検が指定を受け、その御田植え祭りに奉納したのが始まりといわれている。唄と踊りに特徴があり、沖縄民謡の汗水節から歌い出され、その後に奄美稲すり節が続く。使われる衣裳は、粗末な農作業衣（着物に前掛け）、それに鉢巻き等を着用し、農具（鍬や節）を用いて踊る。踊りの振り付けは、農作業の動きである「するす、つち、さんばら」等を踊り手がそれぞれ行い、それらの動作が一体となって農村生活の一端を表現するものになっている。この「芦検稲すり節」の唄と踊りは、島袋貞昌と松井隆吉という二人の人物によって、「汗水節」と「稲すり節」を合わせて作られたものである。なぜ沖縄民謡の汗水節が奄美に伝わっていたのかは分からないが、制作者の一人、島袋氏が沖縄出身であったため、このような歌が作られたのであろう。1982（昭和 57）年に宇検村無形民俗文化財に指定され、現在では芦検民謡保存会によって保存され、村民への継承活動が行われている。

この「芦検稲すり節」が、1994 年時点でブラジルで踊り継がれていた。「芦検稲すり踊り」とブラジルで踊り継がれているものを比較すると、衣装に差はほとんどない。この映像が撮影された「奄美大島移住 75 周年祭」には、着物を着用している者もたくさん写っているが、衣装に使用した着物等は全て「奄美の親戚から送ってもらった」という。稲すり節に使用した衣装類も、奄美から取り寄

せたものであろう。次に使われている小道具（農具類）は、ブラジルでは多少異なっている。鍬やふるいはブラジルでも手に入ったが、大きな道具は用意ができず、手ぬぐいを用いて代用していた。踊り自体の振り付けも、そのため大幅に異なっている。踊りを教えているのは一世だが、実際に踊りに参加している者のほとんどが二世以降のため、脚の動き等は、ブラジルで好まれるような少し複雑な動きが取り入れられたためではないかと考える。踊り自体の名前も「稲すり節」がなぜ



写真9 「敬老会」(1995年)

「汗水節」と変わってしまったのか。プログラムを作成したのは司会進行を行った肥後英樹氏含め「奄美交友会」である。奄美交友会には宇検村出身者も居たというが、演目名を掲載する際になぜ「稲すり節」にしなかったのだろうか。演目を演じた松井ノエ氏と、この映像が撮影された当時「奄美交友会」「ブラジル奄美会」の両方で奄美の踊りを教えていた島田シズエ氏（宇検村出身）が亡くなってしまった今、この変化について分かる人がいなかった⁽⁶⁸⁾。これについては、改めて元「奄美交友会」への聞き取りを行いたい。

⑤ 奄美ブラジル移住 80 周年記念式典

1998年10月11日にブラジルで開催される「奄美ブラジル移住八十周年記念式典」へ参加するため、日本側でも旅行会社が企画をし、参加者を募った。奄美で行われたツアー説明会は9月10日と11日の2日間、奄美大島の名瀬町と徳之島の和泊町で開催された⁽⁶⁹⁾。この訪伯ツアーは、「ブラジル鹿児島県人会創立八十五周年記念式典」にあわせて計画されたもので、この記念式典と同時開催で「奄美ブラジル移住八十周年記念式典」が挙行された。この式典に日本からこのツアーを利用して参加したのは、鹿児島県からは須賀県知事含め84名であり、奄美からは神戸在住者も含めて26名であった⁽⁷⁰⁾。

この時の訪問団長である平坊一氏が帰国後に寄せた感想文によると、ブラジルにはこの当時、奄美出身者は二世や三世も含めると約7千人が居住していたという⁽⁷¹⁾。実際の数は不明だが、子孫を含め1万人にも迫る人数の「奄美人」がブラジルにいたというのは、奄美会を設立し「奄美会館」を建て「奄美」を少しずつ、それでいてしっかりと紡いできた一世たちの努力の賜物といえるのではないだろうか。



写真10 「奄美ブラジル移住 80 周年祭」

V 分裂と解散

(1) 分裂のきっかけ

それは「会館を建てる寄付金を集める際」からすでに始まっていたという。ブラジル在住の奄美出身者に会館の話を知ると必ずと言っていいほど、会館建設時に故郷奄美にまで赴いて集めた奄美人の「浄財」を、「会館の運営をしていた人たち」が「自分たちのいいように」使っているという「噂」があったという。その噂がブラジル全土の奄美出身者に伝わったからであろうか、会館が完成する直前、突然ブラジル奄美会が「⁽⁷²⁾ 声明書」をサンデー奄美に掲載した。少し長いが全文を記す。

ブラジル奄美会 “声明書”

一九七六年四月二十一日付、川内可一氏ほか 53 名の連名に依るブラジル奄美会館建設に関する反対の声明書が、在日郷友会及び関係者へはいふされ御心痛をおかけ致しました事に対し、当会員一同深くお詫び申し上げます。

声明書の内容に就いては全然、事実無根であり主謀者は 4、5 名の方達が個人感情で、会の事情も知らない会員を誘惑し、あのような態度に出た一つの嫉妬心からだと思われま

す。当会は発足以来、会員の親睦及び援護に対し積極的に行動をおこし再三の事件を処理し、会員より信頼をされ、また役員一同は信望されているのが現状です。

一九六九年に会員の集会する場所がなく困惑の果てに皆の力で会館を造ろうとの趣旨を決議、直ちに建設委員会を組織し会館建設への槌音を響かせた次第です。

72 年度に日本内地及び郷土有志御諸兄、大島郡市町村長会及び議長会より再度に渡る補助金を頂き、当ブラジル-サンパウロ市に奄美の人々の力での金字塔を建てるべく会員一同建設に邁進し既報（サンデー奄美新聞、当サンパウロ新聞）の通りに完成が一ヶ月前に迫っている現状にもかかわらず、このような問題が発生したことは主謀者の方々の心の狭さだと嘆かずにはおられません。

なお連名の中の 31 名の方は当初より会館建設には寄付も頂いておらず、当市より 100 キロから 800 キロも離れた方達です。会の会計事情も分からない人達です。また残りの 8 名も途中で寄付金の納入を止められた方達であり、個人的理由で上記の人達を煽動されたものと考えられます。当会では会員の出入会届を受理する規約もなく奄美出身者であれば当然、会員であります。

ブラジル政府に登録した団体で歴然としたブラジル奄美会でありますので、当会の活動を通じて信頼をして頂き今後ともご指導されますようお願いを申し上げます。

以上、上記の問題は当ブラジル国内で解決致しますことを、ここにブラジル奄美会一同にて声明致します。

一九七六年 6/4 ブラジル奄美会

ブラジル奄美会の声明書によると、建設に反対する 53 名による一方的な「反対の声明書」が、突然関係者に配布された。会館完成まであと一歩というところを出された反対声明は、ブラジル奄美会にしてみれば青天の霹靂の出来事であった。しかし、当初から寄付をしていない者や途中で寄付を止

めた者が39名もいた事や、サンパウロ市より遠方に住む「会の会計事情も分からない人達」も含まれていたとあるように、会館建設は奄美会員の総意とはいえない状況であった。

会館建設時の会の様子について、宇検村出身で奄美会の「まとめ役」をしていたというMF氏の娘に当たるFKさん⁽⁷³⁾に話を聞いた。

「会館をつくるとか、そのアレで、なんかガタガタし始めて、反対派と賛成派と、そこもなんだかんだのガタガタで」

(筆者：みんなつくりたかったんじゃないんですね。寄付したのに)

「みんなが寄付をしたけど、その後のなんかかんかできなくて、だって、そうすると、ほら、あんま会館できてから、反対派も、自分たちもじゃあ何かつくってあれしようってから、そういうあれがあったの」

(筆者：それで校友会ができたの?)

「(奄美)校友会、おおかた宇検村の方達、おこしたのは一世の人たち」

ブラジル奄美会のやり方に反対を唱えた人々が「奄美交友会」を結成した。つくったのは宇検村出身の一世たちだったという。こうして、奄美出身者の郷友会は「ブラジル奄美会」と「奄美校友会」の二つに分かれ、それぞれ別のグループが出来てしまった。

このブラジルの奄美郷友会分裂について、『ブラジル鹿児島県人会 創立90周年記念誌』の編集局長を務めた東治男は、奄美の人々は「双方共に内輪の出来事」として「公外」せず「世間の風評をさけるのか、釈明」もさけていたと述べている⁽⁷⁴⁾。また、1998年に南海日日新聞で奄美移民80周年を記念して連載された「ブラジルの大地で 奄美移民80年の軌跡 《15》」でも「奄美会が分裂 しこり解消せず20年」という題名で奄美会の分裂を記事にしている⁽⁷⁵⁾。1998年時点で、分裂から20年も経過していたにもかかわらず消えない「しこり」の存在を明らかにされている。

(2) 解散はどう始まったか

会館建設をめぐる分裂した奄美出身者の会は、2002年突然「解散」となる。その解散への過程を、ブラジルでの聞き取りと当時の新聞記事から見ていく。

① 会館譲渡

会館が譲渡された当時について、宇検村出身FKさん⁽⁷⁶⁾に話を聞いた。

「私ら全然、ぶんきょー(文教)にあれしたのも全然わからない、新聞見て私は分ったんだから、新聞見て知ったんだから、だから私もあれーって思って。えー、シマの人に何にもね、何にも言わずに、自分たちだけであれしたんかね。むこうのね、自分たちでしてる人たち何人かであったんじゃない」

会館の譲渡について話を聞くと、ほとんどの奄美出身者はFKさんと同じように答える。ある日ブ

ラジルの邦字紙に「奄美会館譲渡」の記事が掲載された。それを見て、会館が既に譲渡されたことを知った。しかも、それは「無償」の譲渡であった。「誰にも相談はなかった」という話である。多くの奄美の人々にとって、会館がなくなるのは「晴天の霹靂」ともいべき事象から始まり、遺恨だけが残る「事件」となった。

「その頃の（鹿児島）県人会の会長から言われたんだよ、誰にもそういう話がなくて、自分たちだけでやってるから、県人会も相談しなかったって、全然なかったって。自分たちも県人会も、奄美の人たちだけじゃないんだよ。県人会もアジュエダ（手伝い）したんだよ、あの会館建てるのによって言われたんだけど」

会館の譲渡は、奄美出身者だけでなく鹿児島県人会の人々も「知らなかった」という。誰と誰が相談して行われたのか、「分からないまま」会館は譲渡された。

（筆者：東京奄美会や関西奄美会もお金出したんですよ）

「ここでもみんなね、寄付をしてね。だから鹿児島県人会も出してるんだよって、言われたの。そう私らも新聞で知ったんだよって話したんだけど、そんなわけないよねーって言われて。言われたんだけど……最後に会館を見てたのは“賛成の方の人たち”だから」



写真11 「元奄美会館」



写真12 「元奄美会館のサロンとステージ」



写真13 「元奄美会館の台所」

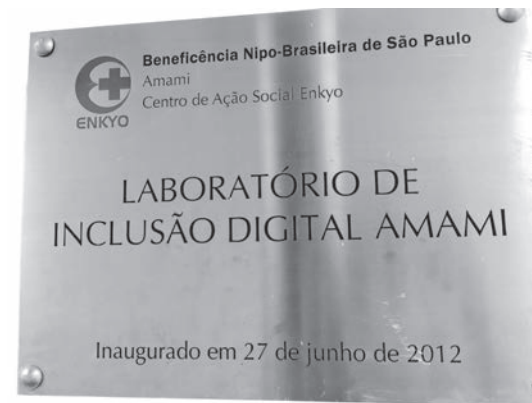


写真14 「元奄美会館の現看板」

会館譲渡時に会館を管理していた人々が「(会館建設) 賛成の方の人たち」だったことで、なくなっただと思われていた賛成派と反対派の溝が、再び深まった。何よりも、鹿児島県人会の人々にも「非難」されたことが、奄美の人々の胸に刺さった。加えて、「祖国日本や故郷奄美の人々に」寄付をしてもらって建てた会館を「無償譲渡」したことが多くの奄美出身者にショックを与えた。

現在元奄美会館は、内部は一部建造当時のままであり、舞台とその脇に階段が残っており、「おどろまつり」の映像に写っている階段がまだ残されていることが分かる。台所は場所自体は同じ所にあるが、内部は改装済みとのこと。また、現在の福祉事業所の名前に「AMAMI」の名が残されていることが看板から分かる。

② 解散

奄美会解散のニュースも「会館譲渡」の報道とあわせて奄美の人々が知ることとなった。会から遠ざかっていた会員は皆口を揃えて解散も「新聞で知った」という。

2002年8月20日付のサンパウロ新聞の記事が『ブラジル鹿児島県人会 創立90周年記念誌』に掲載されている。⁽⁷⁷⁾ 当時のサンパウロ新聞は日本国内で確認することができないので、記事内容が正確なものか確認ができないが、当時の状況を知る手がかりの一つとして記しておく。

「奄美会援協に会館寄贈」という見出しで記事は始まり、次の小見出し「ピラカロン 地域福祉の拠点に 会員の子供自費で改装」で、「鹿児島県奄美諸島出身者でつくる親睦団体、ブラジル奄美会(聖市ピラカロン区、指宿有会長)が今年3月いっぱい解散、残った土地と建物(5百平方メートル)を16日、サンパウロ日伯援護協会(和井武一会長)に譲渡した」と、奄美会の解散と会館の譲渡が伝えられている。会館は16日午前10時から「贈呈式」が催され、関係者45人が出席し譲渡が行われた。譲渡を受けたサンパウロ日伯援護協会(以下、援協)は、会館があるピラカロン地域での福祉事務所の拠点として、出張診療所やデイサービスなどの事業を始める予定であった。

奄美会は、最盛期には150人を超える会員が在籍し、各行事が催される際には会館は来場者で「ごった返し」していたが、ここ数年は「会員の減少」と「高齢化」により活動が「月一回」の集会だけになっていたという。そのような現状では会館の維持管理が困難だと判断し、奄美会25年の歴史に幕を下ろすことになった。

会館は竣工以来、奄美会事務局長であった直義美氏とその子弟により管理されていた。父である義美氏が1998年に亡くなった後は、直義美氏の二男であるラウル氏を中心となって「3万レアル」を投じて屋根やタイルの補修、壁の塗り替え等の改装を行ってきた。譲渡が決まった2002年当時、会館は「市価で24万レアル。購入すれば40万レアル以上かかる」との評価額が試算された。

贈呈式では奄美会長の指宿有氏が「会員が多い時には、バス4台を借り切って旅行に出掛けた。会員は現在、20人しかいなく、会館がもったいない。ブラジル社会、日系社会のために役立ててほしい」と述べた。奄美会は最盛期には200人に近い会員数を誇っていたが、解散間際には会員数は10分の1にまで減少していた。こうして、会員数の著しい減少により、運営困難となった奄美会は解散し、会館は「無償」譲渡されてしまった。しかし、急遽決まったように思われていた会館無償譲渡だったが、実は2000年頃から「内部で会館運営が出来なくなるという事から大義名分とも解釈される援護協会への譲渡案が生まれていた事が内部情報」⁽⁷⁸⁾としてあったという。

この当時のことを、義母が熱心な奄美会員だったという ST さん（宇検村出身）が話してくれた。⁽⁷⁹⁾

「そういう鹿児島県人会と奄美会の、奄美会はどちらかというと、鹿児島県人会とはあまり、仲が良くない。それっていうのは、支部っていうけど、大方従わなかったんだろうとおもいます、支部にならなきゃならないのだろうけど、まあ、日本式にいえば。だけど、まあ、ブラジルは、広範囲にみなさん散らばっているでしょう。だから、ある一部の人たちを、ここにだけ閉じ込めるわけにはいかないでしょう。閉じ込めるってことはなかなかむずかしいですよ」

「たとえばヴィラカホンっていう区があって、あそこには宇検村の人が多いいんだけど。その人たちがね、奄美会と一緒にやっていたんですけど、非常に、日本に寄付金をもらいにいったときに、瀬戸内町とか、宇検村とか、名瀬のある有志たちから、奄美全体に、会館を建てること、有志の形で寄付金もらったんだけど、なんか、こういうことっていいのかわからないけど、ある人たちの話では、寄付金もらった報告書がなかった。明細書を出さなかったものだから、そこからこじれた」

「そういった加減で、あの頃はまだ一世がたくさんいましたから。だいたいのはわかっているんです。S さん（義母）がよく話していたから、S さんは会員だったから」

「鹿児島県の人たちも、あの頃はね、鹿児島県の会長を選ぶのに選挙制にしようという話があって、いわば投票制、今までどっちの会館でも投票制は使用しなくて、ある幹部によって、理事とか、そうひとに幹事をさせるんです。投票制があるところはわずかだった。したらね、実際の話、宇検村の方が多いいですよ。だから、鹿児島県の人としては、奥はわからないけど、分かれた方がいいんだと感じました。だから、宇検村の一世がまだ生きてる人が多かったから、宇検村の人たちは会に熱心だしね、投票制にしようかという話があったが、投票制にはならなかった。だから、都合のわるいことには、鹿児島県人会は両方にね、椅子とか寄付しているんですよ。本当なら、鹿児島県の人が入って、良く行くようにするのが本当なんですよ。だって、別々に何を持って行くとか、援助するんですよ。鹿児島県の中から、奄美の人ではない人も奄美会に入っていた。その人たちが上に立っているわけ。豊臣秀吉じゃないけど、どういう策略があったのか。負けるからね、当時は。サンパウロには少なかった、鹿児島県人は。宇検村が多かった。そういう加減でね」

ST さんは、奄美会員として積極的に活動をしていた義母から聞き及んでいた話から、鹿児島県人会と奄美会の間には確執があり、鹿児島県人会が奄美会を分裂させようとしていたのではないかと感じていた。

鹿児島県人会 90 年誌の編集委員長の東治男氏は、奄美会の分裂について記念誌の中でこう述べている。

「親睦融和、相互扶助、伝統文化の継承、次世代人材の育成等何処の団体結成に先だってうたわれるこの文句がこの様なものです。会館落成まもなく親睦融和の言葉をかえす様に奄美会と奄美交友会に二分された事か（ママ）将来の明暗を占った様でした」

「初代会長 友宏三氏 二世で立派にこの会館の落成に貢献された事はみんなが讃辞を送るところです。奄美大島に生れ育った人のハングリ精神感性の微妙さは他の人々には判りません。そうゆう感性の微妙さの中に奄美大島出身以外の人を組織の第二代の長に置いたのも二分した奄美出身者の溝を一層大きくした事にもなりました。参与とか顧問とかいう立場であれば二分した方々を統一できたのかもしれない」

奄美会は、「どこの日系団体も発足当時は一世主導で運営され」ていたように、その前身である同志会設立当時は奄美出身者が中心であった。しかし、同志会から奄美会として正式に発足した際、奄美出身の一世ではなく、ブラジル生まれの二世である友広三氏が会長に就任した。そして奄美会発足後、会館建設のために組織されたブラジル奄美会館設立委員には、奄美以外の松田年三津氏（鹿児島市）が監査役に就いた。建設費募金運動で県に陳情を行う程、中心的な活動をしていた奄美会顧問の山下量加氏は鹿児島県揖宿市の出身であった。『鹿児島県人発展史 拓魂』に掲載されているブラジル奄美会の広告では、奄美会の「常任相談役」として山下氏の名が記されている。その間、奄美会の会長は友広三氏が就任していたが、『ブラジル鹿児島県人会 85 年誌』では 1998 年度役員名簿のブラジル鹿児島県人会の支部長名簿に「アマミ会 山下量加」とあり、この時点で奄美関係者ではない山下氏が奄美会会長に就任していた。東治男氏が指摘しているのは、この山下氏を会長に据えたことであり、ST さんが感じていた「確執」は「奄美大島出身以外の人を組織の第二代の長に置く」ことで噴出した、奄美出身者と奄美出身「以外の人」の間に生まれたものである。

奄美出身者に奄美会の分裂について尋ねると、まず会館譲渡を「新聞紙上」で知ったという話から始まる。会館落成前から反対派が存在し、落成後間もなく奄美会は校友会と二分したが、山下氏の会長就任をきっかけに奄美の人々の間の溝は「一層大きく」なってしまった。会館譲渡の話は、2000 年頃から「内部情報」として噂されていたが、奄美出身者ではない山下氏が会長を務めていたため、「鹿児島県人会」が奄美会を分裂させようとしているのではという話と相まって、一部の奄美出身者たちの奄美会への不信は大きくなっていった。やがて奄美会は解散・会館譲渡が決定したが、その際の告知も、大々的に協力を仰いだ故郷奄美に対して、「(会館譲渡と解散の) 通知を組織の長自らしたのではなくその夫人から電話連絡で行われた」という話もあり、これを聞いた奄美出身者同士の間には、埋まることのない大きく深い溝が出来てしまった。

おわりに

本稿では、ブラジルの奄美出身者たちによる郷友会「ブラジル奄美会」について、その設立過程と、そこで行われていた文化継承、そして会の終焉について、写真や映像記録また当時の新聞記事等を基に、奄美出身者が組織する会の持つ性格と組織的特徴について考察をした。

「ブラジル奄美会」前組織である「奄美同志会」が組織された時点では、他の奄美系郷友会と同様にその目的に「親睦融和」を掲げていた。しかし、他の郷友会のようにシマごとの小さな単位ではなく、「奄美」という大きな枠組みの中で「親睦融和」を図る必要があったため、シマや奄美大島内に限らず親睦を図る会を組織した。それは、シマから遠く離れた異国の地で、沖縄や鹿児島からの“独

立”を目指したためではなかったのだろうか。それまで沖縄県人の会館を賃借していた会が、組織を「ブラジル奄美会」と改める際に、設立主要目的を「会館建設」へと変更した。奄美の人々にとって会館を賃借している事への抵抗が、独立した会館を持ちたいという動きになったのであろう。この自前の会館を持つために組織されたという点に、「ブラジル奄美会」の大きな特徴とその本質をみる事ができる。

しかし、会館建設を主要目的に据えた会へ反対を唱える者たちがいた。それにもかかわらず会は組織され、故郷奄美を巻き込み、半ば強引に会館建設が進められた。それにより会館落成直前には「反対声明」が出されてしまった。ブラジル奄美会は、「最初からまともにはなかった」と言われるように、会館建設のために結束する必要があり、「親睦融和」はそのための目的であったのである。

本稿では、現地ブラジルでの聞き取りを通じて、これまで明らかにされてこなかったブラジル奄美会の設立経緯とその終焉について、明らかにすることができた。しかし、奄美会館が建てられる以前に借りていたという沖縄会館を所有する沖縄系組織（県人会）との繋がりについてまで言及することができなかった。また、ブラジル奄美会を実際に運営していた側の人々やその子弟たちから、当時の状況について話を聞くことができなかった。さらに、奄美会館建設に協力をした東京奄美会や関西奄美会への聞き取りも、今回の調査では行うことができなかった。これらを今後の課題としたい。

最後に、奄美ブラジル移民 100 周年記念式典⁽⁸⁰⁾を無事に終了した半年後の 2019 年 2 月、筆者はサンパウロで参加者たちに感想を聞いて回った。式典を主体となって運営していたヴィラカホン区周辺に住む奄美出身者とその子孫たちは、「すばらしい会だった」と興奮未だ覚めやらぬといった感想を述べてくれた。その一方で「行くんじゃなかった」という声もあった。その声は、ブラジル奄美会の中心人物側の親族から発せられた。ブラジル奄美会で長く重役を務めていた人物の親族に当たる MY さんは、100 周年の祝賀会がヴィラカホン区で開催されると聞いたとき「へえ、ヴィラカホンにそんなに奄美の人が住んでいるんだ」と感心したという。そこで、せっかくの祝いの席だからと、祝賀会に参加したところ、そこには「奄美会に反対した人たちがばかりがいた」という。MY さんは、父親が奄美会の運営をしていたため、反対派は好ましからざる人々という記憶があり、「一緒にいたくない」と思ったという。そして「知っていたら行くんじゃなかった」とも語った。

また、その年の 11 月には奄美訪問団が組織され、ブラジルから奄美出身者の子孫たちが奄美を訪⁽⁸¹⁾れた。MY さんはそのツアーにも「参加したかったけど、やめた。あの人たちと一緒に旅行したくないから」と参加しなかった。このように、会の解散からすでに 20 年近くが経っているが、今もしこりはしっかりと残っており、溝は一向に埋まる気配を見せていない。MY さんはブラジル生まれの二世（60 代）である。二世ではまだ親たちの世代の「紛争」を自分の歴史の一部としてみてもいいだろう。MY さんの子どもである三世（30 代）は、祖父たちの世代の争い事は「昔の事」といい、自分のルーツである奄美には「一度行ってみたい」と語る。奄美会の再開は、彼ら三世の時代を待たなければ難しいのかもしれない。

注

- (1) 田島康弘 1991 「関西における奄美郷友会の実態」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会学編』第43巻 1-19頁
- (2) 田島康弘 1997 「奄美とブラジル移民」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第48巻
- (3) 宮内久光 2017 「近代期における奄美大島宇検村からの移民について」『琉球大学法文学部人間科学科紀要』第36号 17-50頁
- (4) 山城千秋 2010 「ブラジルの沖縄人社会再考」『熊本大学教育学部紀要』第59号 113-123頁
- (5) 注(1)田島、前掲論文(1991)他、田島康弘(1990)「奄美出身者の動向と東京における Segregation の形成——喜界島小野津の例を中心に——」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会学編』第41巻 67-91頁。田島康弘(2001)「奄美における人口移動と「場所の力」」『南太平洋海域調査研究報告＝Occasional papers』第35巻 59-76頁
- (6) 注(5)田島、前掲論文(1990) 67頁
- (7) 田島康弘 1994 「ロサンゼルス奄美出身者の移住と生活」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会学編』第45巻 1-20頁
- (8) 宇検村誌編纂委員会 2017 『宇検村誌 自然・通史編』 678-679頁
- (9) 田島康弘 1995 「奄美大島名瀬市における郷友会の実態」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会学編』第46巻 11-30頁
- (10) 鹿児島県奄美市 HP (<https://www.city.amami.lg.jp/kanko/100nin/meikan.html>)、「全国奄美会」『奄美ふるさと100人応援団名鑑(PDFファイル)』 56-78頁(2019年5月28日最終アクセス)
- (11) 東京奄美会 HP (<http://www.tokyo-amamikai.com/>)、関西奄美会 HP (<https://kansai-amamikai.com/>) (共に2019年5月28日最終アクセス)
- (12) 注(8)前掲書『宇検村誌 自然・通史編』1028頁
- (13) 注(8)前掲書『宇検村誌 自然・通史編』1028頁
- (14) 2018年9月23日練馬区役所本庁舎地下2階多目的会議室で「第41回練馬奄美会総会・懇親会」が開催され、約120人が参加し、シマウタなどの余興を楽しみ、交流を深めた。
- (15) 神戸奄美会の会員や、奄美の市町村から約1億円もの寄付を集め1993年11月に完成した神戸奄美会館だったが、1995年1月阪神・淡路大震災で消失。その後何とか修繕して使用していたが、再開発事業で移転を余儀なくされ、2001年に現在の場所(神戸市長田区若松町3)へと移った。3階建ての会館では2階、3階部分を利用して奄美のシマウタなど伝統芸能教室が開催され、奄美文化を継承・発信する場になっている。
- (16) 関東在住の大島郡瀬戸内町芝(加計呂麻島)集落出身者による郷友会「関東芝会」は毎年5月の最終日曜日に、東京都大田区にある徳持会館を借りて行われる。20年ほど前までは100名前後の参加者で賑わっていたが、近年は参加者も減り、2019年度の会(5月26日)では約50名程しか集まらなかった。それでも富山や静岡など関東以外の地域からも参加する者がいたり、また、故郷の芝集落から地区長が来賓として招かれ挨拶をするなどして盛り上がった。本土で暮らす芝出身者にとっては年に一度の大切な行事となっている。
- (17) 南カリフォルニア奄美会 HP「AMAMIKAI USA」(<http://www.amamikaiusa.com/>) (2019年5月28日最終アクセス)
- (18) 奄美ブラジル移民の歴史については、拙稿「ブラジル奄美移民 受け継がれる島っっアイデンティティー」『立教大学ラテンアメリカ研究所報』立教大学ラテンアメリカ研究所 第46号 73-81頁、注(2)田島、前掲論文 15-83頁、注(8)前掲書 638-680頁を参照されたい。
- (19) 注(8)前掲書 678頁
- (20) 大島新聞 1963(昭和38)年8月13日付
- (21) 『ブラジル鹿児島県人会 創立90周年記念誌 1913年～2003年』 88-89頁

- (22) 南海日日新聞 1968 (昭和 43) 年 8 月 20 日
- (23) 注 (21) 前掲書 89 頁
- (24) サンデー奄美 1969 (昭和 44) 年 6 月 15 日第 45 号
- (25) 南海日日新聞 1969 (昭和 44) 年 6 月 3 日付
- (26) サンデー奄美 1969 (昭和 44) 年 11 月 15 日第 49 号
- (27) 注 (27) 前掲誌
- (28) 注 (25) 前掲誌
- (29) 注 (27) 前掲誌
- (30) サンデー奄美 1970 (昭和 45) 年 3 月 15 日第 53 号
- (31) サンデー奄美 1971 (昭和 46) 年 1 月 3 日第 62 号
- (32) サンデー奄美 1971 (昭和 46) 年 4 月 4 日第 65 号。翌 5 月 2 日発行の第 66 号には「ブラジル奄美会館設立趣意書」が掲載された。
- (33) サンデー奄美 1971 (昭和 46) 年 10 月 3 日第 71 号
- (34) サンデー奄美 1973 (昭和 48) 年 10 月 7 日第 95 号
- (35) サンデー奄美 1975 (昭和 50) 年 3 月 2 日第 112 号
- (36) サンデー奄美 1975 (昭和 50) 年 8 月 3 日第 117 号
- (37) サンデー奄美 1976 (昭和 51) 年 6 月 6 日第 127 号
- (38) サンデー奄美 1972 (昭和 47) 年 10 月 1 日第 83 号
- (39) サンデー奄美 1973 (昭和 48) 年 3 月 4 日第 88 号
- (40) サンデー奄美 1974 (昭和 49) 年 6 月 2 日第 103 号
- (41) 注 (36) 前掲誌
- (42) 注 (37) 前掲誌
- (43) サンデー奄美 1975 (昭和 50) 年 9 月 7 日第 118 号
- (44) サンデー奄美 1975 (昭和 50) 年 10 月 5 日第 119 号
- (45) サンデー奄美 1976 (昭和 51) 年 1 月 4 日第 122 号
- (46) サンデー奄美 1976 (昭和 52) 年 3 月 7 日第 124 号
- (47) 注 (38) 前掲誌
- (48) サンデー奄美 1978 (昭和 53) 年 3 月 5 日第 148 号
- (49) サンデー奄美 1978 (昭和 53) 年 8 月 6 日第 153 号
- (50) 注 (21) 前掲誌
- (51) 大島新聞 1963 (昭和 38) 年 8 月 13 日付
- (52) 大琉球写真帖編集委員会 1990 写真番号 142 「奄美大島移住 45 年祭、姉の友ギンズル夫婦が参加」
提供山田米三氏 (名瀬市)
- (53) 2019 年 3 月 10 日サンパウロ市内在住の友米三氏の姪に聞き取りを行った。
- (54) 注 (52) 前掲書 写真番号 143 「昭和 40 年 2 月 29 日 鹿児島県人会主催の祝賀で演ずる奄美出身者の子弟」 提供山田米三 (名瀬市)
- (55) サンデー奄美 1971 (昭和 46) 年 5 月 2 日第 66 号
- (56) 注 (34) 前掲誌
- (57) サンデー奄美 1972 (昭和 47) 年 3 月 5 日第 76 号
- (58) 注 (35) 前掲誌
- (59) サンデー奄美 1978 (昭和 53) 年 10 月 1 日第 155 号
- (60) サンデー奄美 1982 (昭和 57) 年 9 月 5 日第 202 号
- (61) サンデー奄美 1984 (昭和 59) 年 1 月 1 日第 218 号
- (62) サンデー奄美 1984 (昭和 59) 年 10 月 7 日第 227 号

- (63) サンデー奄美 1984（昭和 59）年 11 月 4 日第 228 号
- (64) サンデー奄美 1988（昭和 63）年 12 月 4 日第 277 号
- (65) ブラジル鹿児島県人会が発行する記念誌では、会の支部として「ブラジル奄美会」と「奄美交友会」の名前を見ることができる。『ブラジル鹿児島県人会 75 年の歩み 1913-1988』では、まだどちらの名前も登場しないが、『ブラジル鹿児島県人会 80 年の歩み 1913-1993』では、「1993 年度支部長名簿」（51 頁）に「奄美会 友広三」と「奄美交友会 高田基治」と書かれており、1993 年度には両会が共にブラジル鹿児島県人会の支部として存在していた事がわかる。『ブラジル鹿児島県人会 85 年の歩み』1998 年でも「ブラジル鹿児島県人会 支部長名簿」（71 頁）に「アマミ会 山下量加」「アマミ校友会 川畑勲」と両会の名前を見ることができる。しかし注（21）前掲書の「ブラジル鹿児島県人会支部長名簿 2003 年度」（163 頁）では、「アマミ会 山下典子」と奄美会のみが記載されており、「奄美交友会」の名前はなし。県人会発行の記念誌だけでなく、1977 年にサンパウロ新聞社が編集・発行した『在伯鹿児島県人発展史』には記念誌発刊の祝辞が掲載されている頁に各県人会が広告を載せているが、その中に「ブラジル奄美会」の名も掲載されており、1977 年時点で「ブラジル奄美会」が正式に組織された団体だということが分かる。
- (66) サンデー奄美 1994（平成 6）年 8 月 7 日第 345 号
- (67) 2014 年 9 月 24 日、サンパウロ市内の HATSUKO さん宅で聞き取り調査を行っていた際に入手したものの。
- (68) HATSUKO さんの母は「ブラジル奄美会」「奄美交友会」の両方で会員にシマウタや踊りを教えていた。2015 年 5 月逝去。
- (69) 南海日日新聞 1998（平成 10）年 9 月 9 日
- (70) 南海日日新聞 1998 年 11 月 4 日付「ブラジルの大地で 奄美移民 80 年の軌跡」《1》。奄美の地域紙である南海日日新聞では 1998 年 11 月 4 日から「ブラジルの大地で 奄美移民 80 年の軌跡」という連載を開始。連載終了後には写真展も開催してブラジル移民 80 周年を祝った。
- (71) 南海日日新聞 1998（平成 10）年 11 月 10 日付
- (72) サンデー奄美 1976（昭和 51）年 7 月 4 日付
- (73) 2018 年 2 月 21 日サンパウロ市内の FK さんの長女が経営する会社事務所にて聞き取りを行った。FK さんは 1944 年生まれ、1957 年渡伯。
- (74) 注（21）前掲書 89 頁
- (75) 南海日日新聞 1998 年 12 月 1 日付「ブラジルの大地で 奄美移民 80 年の軌跡」《15》
- (76) FK さん、前掲
- (77) 注（21）前掲書 90-91 頁
- (78) 注（21）前掲書 93 頁
- (79) 2014 年 9 月 24 日サンパウロ市内 ST さん宅にて聞き取り。ST さんは宇検村出身 1957 年渡伯。
- (80) 2018 年 7 月 22 日ブラジルサンパウロで日系最大のイベント「日本まつり」が開催され、それに合わせて「ブラジル鹿児島県人会創立 105 周年記念式典」と「奄美大島々民ブラジル移住 100 周年記念祝賀会」が開催され、宇検村から村長含め 5 人の慶祝団が参加した。サンパウロ市ヴィラカホン地区の貸し会場に在伯奄美出身者とその家族約 160 人が集まり、盛大に 100 周年を祝った。
- (81) 2018 年 11 月初旬、鹿児島市で「第 1 回鹿児島人世界大会」が開催され、ブラジルから奄美出身者と二世・三世約 18 人が参加した。その内 16 人は宇検村関係者で、同年 7 月に宇検村長らが訪伯したことへの返礼の気持ちから宇検村へも足を延ばし、村人と交流を図った。

参考文献

- ブラジル鹿児島県人会 1988 『ブラジル鹿児島県人会 75 年の歩み 1913-1988』 ブラジル
- ブラジル鹿児島県人会 1993 『ブラジル鹿児島県人会 80 年の歩み 1913-1993』 ブラジル
- ブラジル鹿児島県人会 1998 『ブラジル鹿児島県人会 85 年の歩み』 ブラジル

ブラジル鹿児島人会 2003 『ブラジル鹿児島人会 創立 90 周年記念誌 1913 年～2003 年』 ブラジル
サンパウロ新聞社編集 1979 『在伯鹿児島県人発展史 拓魂』 ブラジル：サンパウロ新聞社
宇検村誌編纂委員会 2017 『宇検村誌 自然・通史編』 鹿児島県：宇検村教育委員会
大琉球写真帖編集委員会 1990 『大琉球写真帖』 沖縄県：大琉球写真帖刊行委員会